

別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文題目：「保護する責任」概念と冷戦後の国際／グローバル秩序論
——立憲主義的な国際秩序構想から機能主義的な国際秩序構築へ——
論文提出者： 高 澤 洋 志

提出論文は、「保護する責任」(R2P) 概念をめぐる言説と実践の展開を追跡することで、冷戦後の国際／グローバル秩序論の変容を分析したものである。2001年に「介入と国家主権に関する国際委員会」(ICISS) で提示された同概念は、主権の本質を「支配」ではなく「責任」にあると捉え直すことで主権論を刷新し、冷戦後の国際秩序の方向性を示すものであった。本論文は、同概念をめぐる多主体間の政治過程を通時的に分析することで、同概念が提示された当初その基盤とされていた立憲主義的な国際秩序構想が次第に後退し、機能主義的な国際秩序構築へと転換した経緯を明らかにする。そのうえで、同概念の制度化を通じて強化されつつある「超国家的な規律権力」の作用を検討している。

本論文は、以下のような内容をもつ。序章「国際／グローバル秩序への問い」では、「保護する責任」概念と国際秩序論の連動を通時的に考察するための分析枠組みの提示と先行研究の検討が行われる。すなわち本章は、「三つの国連」(加盟国、事務局、市民社会)、「三つの時期」(萌芽期、論争期、推進期)、「三つの系譜」(正戦／介入論、ガヴァナンス論、紛争予防論) からなる枠組みを提示し、「戦略的ナラティブ論」を参考にしながら、同概念の展開の含意を明確化するために導入した「概念セット」(国際秩序／グローバル秩序、国家主権、国際立憲主義／国際機能主義) を説明している。そのうえで本章は、同概念の展開が反映する「望ましい国際秩序をめぐる多主体間の政治闘争」を解明するという試みが先行研究には欠落していることを指摘し、本論文の狙いが、先行研究が十分に着目していない「紛争予防論」の系譜を分析枠組みに組み込むことで、冷戦後の国際秩序論の動態に対する見通しを得る点にあることを説いている。

第一章「R2P 概念をめぐる言説／実践の展開・萌芽期—冷戦終結から ICISS 報告書へ」では、冷戦終結から 2001 年までの萌芽期を分析している。この時期には、「介入と国家主権に関する国際委員会」という「第三の国連(市民社会)」が中心となって「正戦／介入論」を基軸とする「保護する責任」概念の理解が形成されたが、そこには国家間関係の立憲化を推進する「立憲主義的な国際秩序構想」が色濃く反映されていた。ただし、ICISS の提示した同概念は、必ずしも正戦／介入論に限定されるものではなく、90 年代に着目された人道危機への対処策、すなわち「正戦／介入」「(グッド) ガヴァナンス」「紛争予防」という

三つの議論を継受したものであり、同概念に内包された三つの系譜間に、論争が生じる可能性があった。さらに、「ガヴァナンス論」と「紛争予防論」の系譜には、立憲主義的な国際秩序の構築の志向性のみならず、機能主義的な国際秩序の構築という志向性も内在していた。このように本章は、「保護する責任」概念が、元来異なる議論の系譜を輻輳的に縫り合せた概念であったことを指摘している。

第二章「R2P 概念をめぐる言説／実践の展開・論争期—ICISS 報告書から SG 報告書へ」では、2001 年に ICISS 報告書が提出されてから 2009 年に「保護する責任」概念を主題とする初の国連事務総長報告書が提出されるまでの論争期を分析している。2005 年世界サミットでの成果文書の採択は、「保護する責任」概念に対する国際的な共通理解の形成する上で重要な契機となった。成果文書の採択過程では、「第一の国連（加盟国）」が中心となって交渉を行った結果、ICISS 報告書の国際立憲主義的な要素は大幅に削ぎ落とされ、「ガヴァナンス論」を基軸とする共通理解が示された。また、同文書に「紛争予防論」の要素が埋め込まれたことで、世界サミット後は「第二の国連（事務局）」が中心となり、国連の早期警報能力の構築に向けた取り組みが進められ、紛争予防論に沿った「保護する責任」概念の制度化が進展した。このように論争期の展開は、同概念の重心が「正戦／介入論」から「ガヴァナンス論」及び「紛争予防論」へと移行し、国際秩序の再構築の方向性が、立憲主義的な国際秩序構想から機能主義的な国際秩序構築へと転換されたことを示唆する、と本章は指摘している。

第三章「R2P 概念をめぐる言説／実践の展開・推進期—SG 報告書から WS10 周年へ」では、前章の分析を受けて、2009 年以降の推進期の展開を分析している。論争期の WS 成果文書は「ガヴァナンス論」を基軸としつつ「紛争予防論」の要素も織り込んだ「保護する責任」概念を提示したが、推進期には、国連事務局の早期警報体制の取り組みにより、「紛争予防論」を中心に「保護する責任」概念の具現化が進展することになった。本章は、このような紛争予防論の主流化は機能主義的な国際秩序構築の前景化を意味するものであり、冷戦後の国際秩序論の方向性が、立憲主義的な国際秩序構想から機能主義的な国際秩序構築に転換したことを強調している。

第四章「冷戦後の国際秩序論の変遷と超国家的な権力への視座」は、理論的な視座から、「保護する責任」概念の展開に内在する国際秩序変動の深度とその内実を再考している。本章では、フーコーの議論に依拠し、紛争予防論を基軸とする同概念の理解が「超国家的な規律権力」の発展を含意することを示したうえで、同権力の発展が様々な問題を孕むとともに、非国家主体の役割・機能の強化、主権国家の地位の相対化・序列化、そして多様な主体から成る垂直的・階層的な国際／グローバル秩序の再構築に繋がり得ることを指摘している。結

論では、これまでの議論を総括したうえで、「保護する責任」概念の分析により見通し得る国際／グローバル秩序の再構築の方向性を示している。

以上が提出論文の要旨であるが、提出論文は次の三つの長所を持っている。第一に、本論文は、「保護する責任」概念をめぐる多主体間の政治過程を通時的に分析した数少ない本格的な研究である。これまでの研究が、同概念の特定の要素を固定的に理解し、研究者が予め設定した構図のなかに同概念を位置付ける嫌いがあったのに対して、本論文は、同概念の形成・発展過程を通時的に追跡した数少ない研究の一つであり、その実証性は高く評価される。とりわけ、論争期から推進期にかけての国連事務局の役割を緻密に解明した部分に、そのことは当てはまるだろう。

第二の長所は、本論文が、「保護する責任」概念の変容の分析を通して、冷戦後の国際秩序論が立憲主義的な国際秩序構想から機能主義的な国際秩序構築へ移行したことを、明晰に論じている点である。従来の研究が、「保護する責任」概念を立憲主義的な国際秩序構想に引きつけて理解する傾向が強かったのに対して、本論文では、立憲主義的な秩序構想の後退後に浮上した機能主義的な国際秩序論を詳細に検討し、その含意に関する刺激的な議論を展開している。

第三に、こうした機能主義的な秩序論の含意を検討する際に、本論文がフーコーの規律権力論を援用しながら、新たな理論的考察を加えようとしている点である。「保護する責任」概念をめぐる研究は、同概念を立憲主義的な国際秩序構想に引きつけて理解し、国際関係論におけるリベラリズムもしくはリアリズムいずれかの立場から評価を下すという視点が一般的であるが、本論文は、敢えて、超国家的な規律権力の作用を同概念に読み込むという独自の視点に立っている。

他方、いまだ少し精査が必要な点も見受けられる。本論文はフーコーの議論を援用しながら超国家的な規律権力の作用を強調しているが、そこで述べられているのは、機能主義的な国際秩序論が内包する論理的可能性であり、権力作用の実証分析ではない。すなわち現時点で、「保護する責任」概念が実際にどこまで超国家的な規律権力の作用を齎しているかについては、判断が分かれ得るように思われる。

また、本論文で言及される「立憲主義」や「機能主義」という概念は、国際関係論・政治思想史・社会学でそれぞれ異なった意味内容で用いられており、先行研究の検討や理論枠組みの設定の際に、専門領域による意味内容のずれを、今少し意識的に扱ったほうが説得力はより増したのではないと思われる。また、「立憲主義」や「機能主義」の思想史的系譜について言及した部分には、若干強引な整理と思われる部分がある。

しかし、仮に上記のいくつかの点で弱点があったとしても、提出論文が、従

来の研究にない新たな視点を提示したことは疑いえない。したがって、本審査委員会は博士（グローバル研究）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。